医療的ケア児の地域における long term care のマネジメントの在り方についての研究

氏　　名　荒木　俊介

指導教員　工藤　一成

要旨

医学の進歩を背景として、日常的に医療が必要な児童である医療的ケア児が増加している。医療的ケア児が地域で成長していくためには、ライフコースに沿った医療と福祉、教育の連携及び地域のソーシャルキャピタルも含めた多職種による long term care に対するマネジメントが必要となる。本論文では前半で医療的ケア児を支えるわが国の社会保障制度について包括的に考察し、全世代型介護保険を取り入れているドイツの介護保険制度との比較を行った。わが国では深刻化する少子高齢化を受けて、全世代型の社会保障への見直しが進められているが、「介護の社会化」を深め、介護保険の全世代への適応、現金給付の検討により、地域のソーシャルキャピタルとの連携を深めるための介護保険改革の方向性について提案した。さらに、北九州地域における医療的ケア児の家族や支援者の悩みや葛藤、抱えている問題、行政関係者も含めたライフコースにおける今後の課題解決の方向性について、半構造化インタビューの結果を基に、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのフレームワークを用いて、Steps for Coding and Theorization 法による分析を行った。質的分析の結果、ライフステージを通した医療的ケア児のマネジメントにおいては「情報・相談支援の充実」と「医療的ケアに対応可能な居場所の確保」が今後の課題解決のために重要であることを再確認することができた。地域で育つ子どもたちを対象として医療と福祉、教育という複数の分野にまたがる課題の解決、幼少期から成人期、老年期まで地域で継続的に関わる必要性から、マネジメントを担うためには医療・福祉分野の知識を超えたソーシャルワークの能力が重要であると考えられた。さらに、実際の医療的ケア児に必要なケアの担い手として、現在の医療・福祉の専門職だけではなく、地域でインフォーマルな支援を行うことができる人材へのタスクシフトについても検討が必要であり、そのようなインフォーマルな担い手が、災害時などの非日常の場面においてはなにより重要となる。担い手を巻き込み、確保するために日頃からの地域での繋がりを作るようなマネジメントがこれからの医療的ケア児の long term care には求められる。